

真の「読解力」を高めるために

校長 森 和 久

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしく願いいたします。

さて、OECDが行っている国際的な学習到達度調査(PISA調査)の結果が昨年末に公表され、日本は「読解力」に関して国際的な順位が下落したことが大きく報道されました。このPISA調査で測ろうとしている「読解力」は、「①情報を探し出し、②理解し、③質と信ぴょう性を評価し、内容と形式について熟考し、矛盾を見つけて対処する力」です。一般的に「読解力」とは②の「情報を正確に理解する力」と捉えられがちなのですが、PISAでは①や③も加えて読解力を定義しています。とりわけ今回から、「質と信ぴょう性を評価する」「矛盾を見つけて対処する」が定義に追加されました。私たちが情報に向き合う際に必須の能力だからでしょう。

日本の生徒は、②は高得点でしたが、①と③の正答率が低下し、とりわけ③の新たに追加された定義に関する問題の正答率が低かったようです。また、自由記述形式の問題で、自分の考えを、根拠を示して説明することが苦手であるという結果でした。

2003年の調査で、日本の読解力の順位が大きく下落した「PISAショック」を契機として、「PISA型読解力」の育成を目指してきたにもかかわらず、今回このような問題点が出たのは、どうしてでしょうか。今回出題された「パソコン上の情報を読み取る問題に、日本の生徒が慣れていなかった」という分析がありますが、それだけではないと思います。

私は、情報を探し出したり、質と信ぴょう性を評価し、矛盾を見つけて対処したりする経験の乏しさ、とりわけ、テストの形式でこのような課題に対処する経験の乏しさがあるのではないかと考えます。

学校の国語の授業においては、「正確に読み取る」だけでなく、「自分の考えをもつ」ことは日常的に

行われています。そして、発信者の知らせたいことを正確に受け取るだけではなく、自分が知りたいことを取捨選択して受け取ったり、情報を批判的に精査し、自分なりの解釈をしたりする学習が、近年ますます重要視されてきています。

ところが、こういった学習と児童生徒が受けるテストが乖離していることが問題なのです。授業では、情報に対する個性的な想像や批判的な見解を述べ合っても、多くの場合、テストになると、文中にある文言の抜き書きや要約が答えになる問題しか出されなくなります。「受け手の考え」を問うと客観的な採点が難しくなるからです。



大学入試において記述試験の導入が見送られた議論をみれば明らかなのですが、客観性・公平性を担保しようとする、客観的な正解が明快に判定できる問題しか出せなくなります。今私たちが求めているのは「客観的な正解」がない問題に向き合う力であるにもかかわらずです。

テストに対応しようとするほど、「客観的な正解」がある問題、即ち「正確に読み取る」学習の比重が大きくなり、結果として日本の生徒がPISAの問題に戸惑うことになるのではないのでしょうか。

公平性・客観性の制約を受けざるを得ないテストから逆算して児童生徒の学びを構築していく発想、即ち受験対策のための勉強を中心に据える発想では、PISA調査で言う読解力の①や③が育ちにくくなります。つまり、日本の教育の、ひいては日本の、国際競争力は低下します。本校では、そうならないように「自分の頭で考え、自分の言葉で表現する」学習を、これからも大切にし、工夫した実践を行っていきたくと年頭にあたり考えるところです。

